
神様の作り方

折田 笠斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の作り方

【Nコード】

N4111R

【作者名】

折田 笠斗

【あらすじ】

普通の中学生高田梓には小さい頃から変わった声が聞こえていたある日その声から『こちらに来ないか？』と誘われたそこから日常が壊れていった

始まり

「ちつくしよー!!」

「なんで世の中にはテストなんてものがあるかねー」

「そう学校のため息をつきながら言っている人物がいた

「おいおいどうした(笑)死んだか?梓?」

「そう小馬鹿にしながらやってきたのは七宝だった

「うるせーよー」

最悪だそう思った

こいつはクラスでも一二番にはいるほど頭がよいがしかし俺とはなぜか仲が凄くいい

その時・・・

ある声が高田梓という人間の耳元にささやいた

『その世界が気に入くわれないのならこっちにくればいいこっちなら何も無い』

「???空耳か??」

自分でもあまりよく分からなかったこの声は最近よく聞こえるようなようになっていた小さい頃から聞こえていたが最近になって回数が多くなってきた

「どうした?」

心配そうにそういわれたがここは言っても嘘つき呼ばわりされるだけだ

「ううん大丈夫」

とりあえず疑われてはまずいここはばを作っておこう
そう思った

「そっか」

納得した様子だった。がまだ心配しているようだった。

こいつには話してもいいかなそう思った。

いや、でもダメだ！安心して言った相手に何回裏切られたと思っ
ているんだ。

嘘つき呼ばわれされ大切な友達に何回も裏切られた。

もう友達は無くしたくない。

その一心で話をはぐらかした。

「そ、そーいえばさお前はテストどうだったんだ？」

必死で隠そうとしたしかし

「梓お前なに隠してんだ？」

そういったしつぱの顔にはいつもの巫山戯た様子はなくその表情
は真剣そのものだった。

「なにもないって」

半笑いではぐらかした。

「何隠してるか知らないけど俺とお前は友達だ」

正直凄く嬉しかった。

こんな事言ってくれるのはこいつだけだでも……もし裏切られ
たら……

「ありがとう」

そういつて七宝とは別れた。

それ以外は何も言えなかった。言葉が見つからなかったのだ。

涙をみせる訳にもいかずだまってその場を立ち去った。そしてすぐに
家に帰った。

「ただいま」

どうせ親も信じてくれないんだろ。もう俺の周りに信じてくれるの
はあいつだけだ……

そう思っつて自室に戻った。

その時

『苦しいか？それはお前がこちらに来ないのが悪い』

「来ないのが悪いってドコにだよ」

自分でも苛ついていた意味が分からない

『来たかを教えてほしいか？』

「ああ、教えてほしいね、けどそんな場所はあるわけがないそもそもお前は誰だ？なぜ俺に喋ってくるんだ？」

『私の名はコウネリアだ喋りかけるのはお前が心配だからだ』

意味が分からない、コウネリア？ドコの国の人だ？

心配だから？心配だからって俺にだけ聞こえる声はどういう事だ？

『もしこちらに来るつもりがあるなら友人を3人以上つれて紀田神社まで明日の夕方にこいそこでこちらの世界に連れてきてやる』

3人？なぜ人数が制限されるんだ？でも俺の話を通じてくれる奴なんてそんなにいないよ一人はいるけどそいつだっってくるかわからない 待てよ七宝はどうだ？あいつならきつと・・・でももう友達はなくしたくない

「あのコウネリアさん？期限を一週間にのばしてよ1日はさすがに・・・」

とりあえず日にちが足りなすぎるとりあえずのばしてもらうために下手にでた

『いいぞじっくり考えるんだな』

またかこの人物は謎な部分が多すぎるまずはいろいろ探らなければ・・・

話を考えるのはそのあとだ

～翌日～

こういう話ができるのは・・・とりあえずあいつに相談してみるか
「おい季亜ちよつと話があるんだけどいいか？」

やっぱり【声】の話が気軽にできるのは季亜だけだ

こいつは昔っから俺の事を信じてくれていてみんなが俺を疑った時も信じてくれた

とにかくいい奴だ

「なーに梓？」

「わりいなちよつと相談があつて」

「全然いいよ」

そう心配しているような言い方で言ってきた
やっぱりこいつはいい奴だ

「あのさ声の話なんだけど」

「うん」

急に真剣な表情になった

季亜はこのことで梓が悩んだり色々な目に遭ってきたのを知っていたからだ

ただ季亜は昔からの幼なじみからか一度も梓を疑ったことが無いのだ
その後昨日の出来事をすべて話した

「何それ！ここの世界じゃない世界があるの！？凄いね！」

子供のようににはしゃいだ様子だった

「ああでもさ怪しくないか？」

そうすると季亜は悩んだ顔でこういった

「そう・・・かな？」

「うちがいいと思うけど・・・」

しばしの沈黙が訪れる

「・・・」

気まずい雰囲気だ、何か話さなければ

「あのさ・・・季亜はその世界に行ってみたい？」

「行ってみたい！！」

即答だった

ではまず一人つと

あと1人か・・・誰を当たろう？

「色々ありがとうね季亜決まったらメールで」

「うん！！」

誰にしよう???

やっぱりあいつしかいないか・・・

でもな！

友達をうしなうのは・・・

「おーい七宝」

「なんだ梓？」

「えつと・・・」

畜生やっぱ勇気がでないもしこれで親友を失うかと思うと・・・

「なんだよ？」

「ゴメンやっぱなんでも無い」

ダメだどうせ裏切るに決まってる

でもあの時何があっても友達だって言ったよな・・・

「そっかじゃあな」

「またね」

今日は言えなかった

家に帰ってあいつと話すか

俺は帰る途中も悩んでいた

いやな事が何も無い世界？

そんな物あるはずがない

でもそれで本当に暮らせるなら・・・

『人数は集まったか？』

またこいつか

「あつまってねーよ」

『そうか』

やはりこいつは謎が多い

色々と聞くか・・・

「コウネリアお前は何者なんだ？」

とりあえず人かどうかを確認しなければ・・・

『それはまだいえん』

言えないってことは何か隠していることがあるのか？

「じゃあお前は人か？」

返事が返ってこない

消えたのか？

そりゃあまあ【声】だけの存在だからいつでもきえらねんだろうな
シカトしてればそれでいいんだもんな
くそっ

とりあえず行くにしろ行かないにしろ人数は集めた方がいいよな
やっぱり七宝に話してみるか

く2日めく

「ちよつと話しがあるんだ」

「なんだよ？そんな緊張して」

言いたくない・・・けど言わなきゃ始まらない

「あのさこの前の事だけどさ」

「ああ」

急に真剣な表情になった

すべて話した【声】の事もそのせいでどんなことに遭ったのかも

「すっげーなお前」

「し、信じてくれたのか？」

驚きだった季亜以外からもこんな反応をする人がいたなんてそして
信じてくれる人がいたなんて

とても嬉しかった

「信じるも何も本当の事なんだろ？それを疑う理由なんてどこにも
無いじゃないか」

「ありがとう」

それだけ言って場をさった

親友に涙は見られたくなかったのだ
大切な事を聞くのを忘れてしまった
だが今のままじゃ会いに行けない

また後でにしよう

落ち着いてからもう一度七宝に会いに行った

「でささっきの話のつづきなんだけど」

「うん」

「その世界に行きたい？」

すこしとまどつたようだった

「行きたいけど・・・」

「行つてる間俺たちはこの世界にはいないんだろっ？親とかが心配するぜ？」

「こんど聞いてみるよ」

「またあした」

「うん」

そうかそういうこともあつたな

「コウネリア？いるか？」

『いるぞ』

「もし俺が行くとしてその間俺はこの世界には存在しないのか？」

『存在することはする』

「そうなのか」

これなら七宝も来てくれるかも

『なぜだ？』

「いやちよつとな」

（3日目）

「七宝？昨日の続きだけどいいか？」

「いいぞ、でどうだった？」

「この世界にも一応いるらしいぞ」

これできてくれるか？

「そうか！じゃあいくぞ！！」

「でもその前に色々準備をしなければ」

危ない橋をわたるんだ念入りにいかないよ

「でも何を準備するってんだ？」

「相手は何者かわからないんだ善か悪かもわからない」

「そうか」

「とにかく明日もう一人混ぜて話しあうぞ」

その瞬間七宝が黙った

「……」

「どうした？」

「もう1人って誰だ？」

「なんでこんなこと聞くんのだ？」

「季亜だけど……なんで？」

「季亜って中島季亜か？」

季亜の事になるとなんだかやたら突っ込んでくるな

「そうだけど」

「マジ！？お前季亜さんとどういう関係だ？」

こいつもしかして季亜の事が好きなのか少しからかってみよう

「幼なじみだ お前季亜のこと好きなのか？」

「す、すきじゃないし別に」

「そうか」

明日が楽しみだな

「それじゃあなー」

今日は珍しくコウネリアは出なかった

というかそう毎日毎日でもらっては困る

今日は疲れた季亜にメールをおくって寝よう

メール

人数が決まったから明日3人で話し合おう

季亜へ

〜4日目〜

今日は3人で集まる日だ

七宝をおもいっきりからかってやろう

待ち合わせの場所に行くとすでに七宝がいた

「よう、気合いはいつてんなー」

まずは簡単にからかう

「べ、別に気合いなんかはいつてないし」

動揺してるよ 単純だなー

その時季亜がきた

「話って何話すの？」

七宝がかなり緊張している

「七宝どうした？そんなに季亜の方ばかり見て？」

七宝の顔が赤くなった

「べ、別に何でもないよ」

季亜が不思議そうな顔で七宝を見つめる

「大丈夫？」

よけい七宝の顔が赤くなった

「梓てめー覚えとけよ」

そういつて七宝はどこかに走り去っていった

「七宝君どうしたの？」

状況が読めていない季亜が不思議そうに聞いてきた

「気にしなくていいよ」

話がそれってしまった

「話を戻そう。で結局分からないまま突っ込んだら危ないから季亜

も少し調べてみて」

「わかった」

調べてみようとは言ったものの異世界の神なんかを載せた本はある

のかはだはだ疑問だった

だが動かないよりはましだ

「じゃあ明後日にまた集合ってことで」

一週間後まで残り三日か・・・

それまでにコウネリアという人物が本当に良い人物なのかその間に
見極めなければ

〈5日目〉

その時梓は悩んでいた

ある一冊の本をもって・・・
そこに書かれていたのはコウネリアと記された人物の名が神とも記
されていた
コウネリアは神だったのか!?
でもなぜ神様が俺になんか声をかけるんだ?
このことは季亜達に知らせるべきか?
でもこんな事を知っても疑問が大きくなるだけだ
とにかく集まるのは明日だ
明日話そう

〈6日目〉

今日はみんなで集まる日だ

俺は1つしか分からなかったけど他の人はどうだろう?

いつもの場所に行くともうすでに2人が待っていた

「なにか分かったか?」

2人ともあまり浮かない顔をしていた

「そうか・・・」

それを察した俺はやはりあのことを話す事にした

「コウネリアって神様みたいなんだ・・・」

2人とも驚いていた

「そうなのか!?!」

「ああ」

やはり不安になっていた

言わなかった方が良かったか・・・

「それでも行く?」

これでこれからの事がすべて決まる

重大な事だ

「俺は行こうと思う」

七宝が言った

続けて季亜も

「私も行っていいかな？」

「よしじゃあ行くか」

とりあえず明るく言った

「明日の夕方、紀田神社に集合だ」

これで良かったのだろうか

こんなに安易な考えで・・・

始まり（後書き）

この小説を読んでくださり有難うございます

まだまだ至らぬ点もございますがこれからも読んでいただけると幸いです

是非よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4111r/>

神様の作り方

2011年10月8日20時22分発行